

サマリートーク

高橋 徹

札幌学院大学の高橋と申します。

今日一日、三人の講師の先生方のお話を伺って、明日半日さらに補足のお話をいただいた後、全体的なディスカッションがあります。そこに向けて、今日こういった観点が出ているのかなといった辺り、いくつかの論点について最後にお話をさせていただきたいと思っています。

まず、当学部は社会情報学部で、社会情報学という新しい複合的な分野の立ち上げを学問的には意図している学部なわけです。社会情報学は、現状ではまだまだ構築が始まった段階であるような位置づけのもとにあります。その中で様々な角度から社会と情報に関する問題を取り上げて議論しています。そこには、具体的なデータのレベルから思想的な問題まで含めて、あるいは、社会的な問題からある程度個人的な心理の問題まで含めて考えていくというような課題意識があります。今回は、そういった課題意識を反映したシンポジウムの内容かなと思っています。

とくに今回のテーマでありますコミュニケーションという問題は、単なる情報学ではなくて「社会情報学」と名のつく研究分野にとって、やはり最も基本的な現象にあたります。ただし、これには、大変様々な角度、問題がありますので一つにまとめるというのは難しいのですけれども、そういったなかで各先生から出していただいた問題をいくつか取り上げさせていただきたいと思っています。

現代社会においてコミュニケーションというのは、メディアを媒介としたコミュニケー

ションを無視しては考えられない。しかも一つや二つのメディアではない多メディア状況にあるわけで、そういったところを、特に今回は視点として盛り込んだものではないのかと思います。

(講演順とは) 順番が変わりますけれども、まず橋元先生、そして次に秋山先生、そして尾関先生という順番で、論点に触れさせていただきたいと思っています。

まず橋元先生のお話につきましては、いくつか論点があったかと思っています。個人的に興味を持ちましたのは、「こういうメディアができたから、こういうような使われ方をするのだ」というような一般的なメディア論的観点を、データにもとづいて破壊するような論点を出していただいたという点です。とくに若者のメディア利用に関して言いますと、元々持っている先有傾向がメディア利用の仕方に反映していることを、具体的にデータにもとづいて指摘していただきました。メディアが現実を変えようというふうな見方がえてしてされるのですけれども、実はむしろ、普段の本人、あるいは人間関係の現実がメディアの使われ方に流れ込んでいるということですね。

さらに言うと、元々持っていた先有傾向が、メディアというツールの登場によって増幅される側面もあるのではないかと思います。例えば、尾関先生のレジメで、障害のある方のコミュニケーションの場作りにおいて、開かれた共同体というよりは、どちらかというと閉鎖的な同一的空間ができてしまうという指摘がされていました。つまり、元々そい

う会話の機会がなかった方々が、それを可能にするメディアの登場によって会話の機会を見つけ、それまで実現できなかったものをより純化して実現する。そういうかたちで純粋化が進んだために、違う立場の方が入り込みにくい空間ができあがるというような流れです。要するに、元々持っていた傾向なり、ニーズが増幅されてメディアの利用が行われると。

それから個人的な傾向だけではなく、日韓比較が大変話題になりました。国民的あるいは集団レベルにおいても、同様のことが言えるのではないかと思えました。とくに韓国では、先ほど諸先生からご指摘がありましたように、ネットの普及というものが「解放」として捉えられた。そういう、いわば歴史的なメディア受容のコンテキストがあったわけです。

これ以外にも日常的なコンテスト、私はまったく韓国のことは詳しくないので、明日にでも諸先生から教えていただきたいのですが、例えば日本に比べて韓国では上下関係が厳しくて目上の者に対する礼儀をきちんとしていなくては行けないとか、そういったことは耳にすることがあります。そういう日常的なコミュニケーションの縛りがある分、かえってネットのコミュニケーションに解放感を持って参加できるとか、そのような側面が日本より強くあるのかなということを想像してみました。

それから、メディア普及の過渡期的な問題がでてきました。最初に紹介していただいたクラウドの研究の場合は、まだアメリカでも14%程度のインターネット普及率の段階ということ。しかし、その後の研究では、もうほとんどそういった（インターネット利用による）マイナスの影響がみられたという知見が出てこない。このことからすると、「クリティカル・マス」の突破とその前後の変化といった問題が出てきたというふうに思いま

す。

この点については、秋山先生のお話のなかでも、普及度が低いメディアについてはむしろ利用者が少ないがために「危ないよ、危険だよ」というような噂が広がってしまうという指摘がありました。それも利用が一般化すると誰でもある程度良い点、悪い点含めて利用者がそのメディアの実態を知るために、そういう噂が自然と消えて行くというようなお話もありました。このあたりも、どちらかという過渡期的なメディア普及期における現象ではないでしょうか。昔はテレビも「一億総白痴化」というようなかたちで批判されたメディアだったわけですが、そういうふうにして現代を新しいメディアの普及期として捉えるというような観点がありました。

メディア時代というキーワードに関連していいますと、例えばテレビなどで「やらせ問題」などが生じると、真っ先に紙媒体メディア、新聞とか雑誌とかが、好んで批判をするわけです。テレビの腐敗とか墮落とかを批判するわけです。それと同じようなかたちで、新しいメディアに対する、既存メディアの警戒感、「我々の地位を脅かす可能性を持った新しいメディアの台頭」に対する警戒感というもの。これを旧来型の各メディアが持って、それがある程度新メディアに関する論調に反映する側面もあるのではないかと思います。例えばインターネットでこういう危険性があるとか、携帯電話でこういう危険性があるといったような出来事があると、テレビや新聞なんかは、真っ先に取り上げる。

最近テレビ局のスタッフと共同研究などをしていて、その関係でよく話をします。やはりテレビの人間としては、インターネットが我々のライバルになるのではないかと、脅かすのではないかというようなかたちで警戒感を持っていたのです。最近では、必ずしもそうでもないというふうにして認識が変わってきているようですが、そういう警戒感というのは、

やはり普及期においてはあるわけで、それがかえってネガティブ・イメージを旧メディアが増幅するというような側面に繋がっているように思います。実際には、新メディアの利用が一般化してしまえば、「そういうこともあるけれど、実態はある程度みんな安全に使っているよ」ということをみんな知ってしまうわけですが。

続きまして、秋山先生の話の論点に触れたいと思うのですが、まず一つ目は「臨床に立つ社会学」ということでお話がありました。これは先生が実践されているカウンセリングの話も含めてお医者さんとのコラボレーションや裁判所でのお仕事の話などがありました。それから後、パブリックアクセスなどについても触れておられましたし、また高齢者の安否確認などに新しいメディアを利用するといったお話がありました。大きく分けると、生活文化の中の問題解決に新しいメディアの利用をどう結びつけていくか、コミュニケーションを通して新しい生活空間の問題にどう取り組んでいくか、という問題を提起されておられたと思います。このあたりの問題は、あとで尾関先生のお話について触れる際に改めて取り上げておきたいと思います。

それから個人的に関心を引いたお話としては、インターネットの利用に伴う没個性化の進展という話です。これについてはいろいろ分析がありうらと思うのですが、一つ個人的に思ったのは、従来インターネットのようなメディア、携帯もそうですが、そういうメディアがない時代には、例えば学校とか隣近所とか限られた空間の中で若者、子供たちも自分の自我を、他の仲間と比較、対照してアイデンティティを形成していったわけですが、ところが、ネットを通していろいろな人と知り合いになったり、いろいろな人の書き込みを読んで、いろいろな考え方の人がいる、ましてや自分の考えたことはとっくに書かれていることを知ります。そういう経験を積み上げて

いきますと、だんだん自己と比較対照する範囲が広がっていくわけです。そうなっていきますと、自分に対するリフレクションというものが進んでいくことにもなりますが、その結果、参照点となる他者が多すぎることで、かえって自分に対する差異意識、個性意識みたいなものがぼやけていく可能性があるのではないかという気がしました。

それから、尾関先生のお話についてですけども、尾関先生のお話では、今回のテーマであるコミュニケーションの問題を越えて、とくに環境の問題という視点を入れていただきました。それによって、問題の立て方を大きく広げていただいたというふうに思います。その中に、「情報化問題と環境問題の類似性と対称性」という論点がありました。この対称性のところで、資本主義システムと親和的か否かという比較の視点が出されておりました。

これについては、情報化のどの部分をみるかにもよるのではないかと、という印象を持ちました。例えば、産業化としての情報化ということであるならば、かなり資本主義システムと親和的であるのかもしれないと思いましたが、他方でいろいろなコミュニケーション・ツールが普及、拡大した結果、さまざまなコミュニケーションの可能性が拡大、あるいは拡散するといった現象を、資本主義システムと親和的かどうか視点で切るのは難しいのではないかと思います。なぜかといいますと、これは先生自身が指摘しておられますように、むしろコミュニケーション・メディアが持っている可能性を、資本主義システムに対する批判的なポテンシャルを持ったものとして活用していく必要があるし、そういう可能性があるからです。

それからもう一つ、いろいろなメディア論に関わるこれまでの著名な論者の議論を示していただきましたが、基本的に、自我、身体、共同性、自然との関係に、情報化が進んだ結

果、どのような影響がもたらされるかという視点がとられていました。つまり、まず情報化があって、その結果何が起きるかというような視点の取り方が、これまでのメディア論の視点であり、関心であったというふうに思います。

他方で、そういった方向とは逆に、例えば橋元先生のお話では、「メディアが」というよりは「メディアを」というような側面、人々の生活習慣や生活空間がメディア利用のかたちを作っていくという視点がでてきました。そういう意味では両方のベクトルの視点が、今日のお話全体としては出てきたのかなというふうに思います。

全体としてふりかえりますと、尾関先生としては、先程個人的にも質問した部分とも関わるのですが、これから自然環境との接点を持った地域コミュニティ作りと、新しい電子メディアの相補的、共生的な関係というものを求めていく必要があるのだというようにお話であるかと思います。また、秋山先生のお話の中で、文化や伝統といったものを、どうコミュニケーションの中に組み込んでいくかという問題なども指摘されていました。

そういった視点について、あえて一つ問題を出させていただきたいと思います。例えば構築的な形で新しい地域のあるべき姿を描いて、そのように地域を作っていく、伝統を創っていく、地域文化を創っていくとします。そのようなかたちで、地域コミュニティの構築を進めていったときに、それはもしかしたら、こう言うと言弊があるかも知れませんが、一種の新しいバーチャルリアリティと化す部分があるのではないのでしょうか。もっとも、それは一部の人間が没入するネットやTVゲームのようなバーチャル・リアリティとは別物なのだから、別に構わないのだというような視点もありえるとも思います。その一方で、むしろ現代のバーチャル・リアリティといわれるネット空間のコミュニケーションの

ほうが、(その大半が単なるおしゃべりにすぎないとしても) えてして自発的、自生的なコミュニケーション空間になっているのではないか。とすれば、逆にリアルといわれる地域社会のほうが、「これからの地域は、こう作っていかなくてはいけない、こう作っていくべきである」といったかたちで、より人工的、意図的に構築されていく、その意味でバーチャル社会化していくというような、一種のパラドックスがあるのではないのでしょうか。別な言い方をすれば、それでは果たして地域の人々は、どのような形で動機づけられて、新しい地域づくりにコミットしていくのか。その動機づけの条件なり論理というものは何なのかについて、これからさらに考えていく必要があると感じました。

それでは最後に、明日の補足講演で先生方に触れていただきたい論点について、お話をさせていただきたいと思います。

順番は逆転して、最初に尾関先生のほうからなのですが、尾関先生の基本的な問題提起は、今回のテーマの根底にあります脱近代型の社会に向けて、どのように新しいメディアを活用していくかということであったと思います。それを具体的な生活空間の中で、どのように作っていくのか、その方法と論理、ないしはその事例も含めた可能性、そのような部分に触れていただければ、より具体的にフロアの方から意見なり質問が出て、さらに活発な議論が出来るかなというふうに思います。

次に、秋山先生につきましては、いまの尾関先生へのお話へと繋がりますが、個人の自己実現と生活空間における問題解決を結びつけたメディア・コミュニケーションをいかに作ってイけるのか、というものです。そのために、単なる個人の自己実現だけではなくて、生活空間が抱える問題の解決に結びつくような、そういうメディア・コミュニケーションにコミットしていく動機づけ、動機形成とい

うものを、どのようにしたら実現できるのかという問題を、秋山先生なりの視点から触れていただければ、先ほど尾関先生にお願いした問題についてもさらに検討が進むのではないかというふうに思いました。

それから橋元先生につきましては、今日は携帯の話を中心に落としてしまいましたので、まずその話を聞かなくてはいけないということが大前提になりますでしょうか。そのうえで、先程触れました点をさらに発展的に述べさせていただきますと、そのような先有傾向、国民的なレベルでも良いですし、個人的な心理尺度に見られるような先有傾向でもよろしいですが、そういった部分とメディアの持つ可能性の相互関係みたいな部分を、ま

た携帯を通して、あらためて描いていただくと良いかなと思います。また、尾関先生と秋山先生にお願いした問題点に触れる部分で言いますと、メディアをとおして形成されるコミュニティの問題があります。そのあたりに先生の調査経験を含めて、何か言及していただければ幸いです。

また明日、フロアの皆さんからも、それ以外の様々なお質問やご意見もありますでしょうし、時間も限られておりますので、どこまで議論が進められるかわかりませんが、明日の議論がさらに深まりますよう、簡単ではありますが、私の方から若干の論点を出させていただきます。